



社会福祉法人成仁会会長
山崎 シゲさん

『この日が最期かもしれない』 一期一会の気持ちで 入居者様とふれあいたい

「こんなとき、院長ならどうするだろう——」。岩手県大船渡市に本部を置く社会福祉法人成仁会・特別養護老人ホーム富美岡荘の副施設長・小松秀子さんは東日本大震災が起きたとき、真っ先に「院長」こと法人会長の山崎シゲ氏を思い浮かべたという。いつも微笑みを絶やさぬその姿は慈愛に満ち、困っている地元の人たちを両腕を広げて受け止めていた。

**会長の慈愛に満ちた生き様を
長年目にしてきた職員たちが
震災直後に見せた行動とは――**

「3・11」の大津波は大船渡の沿岸部を無惨にも飲み込んだ。高台にある富美岡荘にまでその被害は及ばなかったが、代わりに施設定員135名の3倍を超える避難者（地域住民・職員の家族等約500名）が、文字通り「襲来」したのだ。「すべては愛から始まる」という法人理念を、身を以て実践してきたシゲ会長の背中を見てこなかったら、おそらく職員らは大パニックに陥っていたはずである。だが、彼らはシゲ会長がその場にいたら必ずやるであろうことを即実行した。「富美岡荘に避難してきた人たちすべてを受け入れる」と決断し、全力を尽くしたのである。

一方、そのときシゲ会長は、（社）成仁会の山崎和彦理事長や幹部職員らとともに、仙台市を訪れ、仙台で運営している、（社）杜の里福祉会の理事会・評議員会（山崎和彦理事長）の真っ最中に、この凄まじい震度7の揺れを受け、九死に一生を得た。築40年近い富美岡荘が倒壊してはいないかと、急いで大船渡へ向かった。が、高速道路は通行止めとなり、一般道も大混雑。途中で夜を明かし「施設が、入居者・職員らが相当な被災をしているのでは」と覚悟しながら、翌日の

▼震災後、富美岡荘の敷地内に災害時用の食料を備蓄する倉庫を配置



▲倉庫には約500人分の水や食料などを備蓄



▶成仁会創始者・山崎伊一郎氏の胸像



▲震災後に寄付された介護ロボット「パロ」は入居者の人気者

昼過ぎに辿り着いた。そのときの光景を、前出の小松さんは次のように振り返る。「院長さんの姿が施設の玄関に現れたとき、その場にいた職員は皆一斉に駆け寄り、抱きしめ合って泣きながらお互いの無事を確認しました。そして『これからこの災害と闘いましょう』と、みんな奮い立ちました」また、この時には、電気等のライフライン全てが寸断され、1か月間入浴できず、ガソリンもなく、大船渡市の主要部分の半分が、全て津波に流されていた。

礼をもって老者に仕える。そのために進んで事を成す努力をしていく

今なお白衣をまとい、時間をかけて入居者一人ひとりに声をかけるのは、開設当時からシゲ会長の日課だ。平成11年に脳梗塞で倒れ、生死の境をさまようも奇跡的に回復、後遺症も克服して、生涯現役を宣言している。80代に入り、体調を崩すことが増えても、できるかぎり施設に毎日顔を出し、朝昼晩の職員からの定時報告を受け助言をする。この報告・連絡・指示、人間としての気持ちだが、職員の教育になり、全ての職員とのコミュニケーションとなつている。今でも「毎日聞かないと落ち着かない」と、約36年間変わらぬ日課である。

周囲の職員はシゲ会長の体調を何より気にかけ休養を促すが、当の本人は「人生のラストステージに立っている私にとって、一日一日がとても大切で大事。いつも『この日が、この出来事が、この食事が最期かもしれない』という一期一会の気持ちで一日を悔いのないように生き、戦争・明治三陸大津波、そして、千年に一度の大津波という、激動の時代を生きてきた入居者さんたちと、少しでも多くふれあいたいです」と笑顔で語る。なぜ、ここまでバイタリティにあふれているのか。背景には「礼をもって老者

に仕える」という亡き伊一郎氏の遺言とも言える思いを、妻として同志として引き継ぎ、高齢者福祉に携わる次の世代に伝えるという使命感を抱いているのかもしれない。昭和55年秋、伊一郎氏は59歳の若さでこの世を去った。和彦理事長によれば、伊一郎氏は亡くなる直前に、当時勤務員だった和彦氏に「富美岡荘は職員が人生の修行をする道場なんだ。そういう気持ちでないと人様の介護をお手伝いしてはいけない。礼をもって老者に仕える。この仕事は業務を超えたものでなければならぬ」と語っていたという。それは、シゲ会長曰く「もう一步、もう一步その先に、本当の福祉がある」と。そしてシゲ会長は、意欲的に事業規模の拡大を図り、それにより急増した職員の育成にも心血を注ぐようになる。

特養以外の事業展開は、平成4年にデイサービスセンターや在宅介護支援センターなどの在宅サービス事業を始めたほか、平成5年には県内未設置であった養護（盲）老人ホーム祥風苑を開設。「日本の福祉を変えなければ」と、永年培ってきたノウハウと、目まぐるしく変化していく福祉への和彦理事長の強い情熱とで、もっともっといい施設作りを、仙台において新たに社会福祉法人杜の里福祉会を設立し、新型特養とケアハウスの運営にも乗り出した。そして、千年の湯・秋保温泉の中に「特養一重の里」



▲ヘルメットも各所に配備して利用者を守る体制に



▲震災後すぐに購入した発電機。各フロアに配置



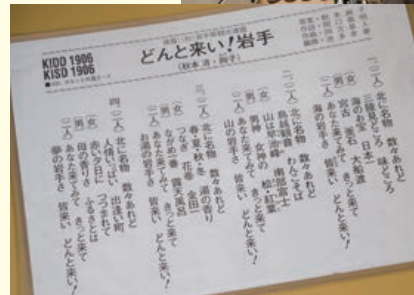
▲養護(盲)老人ホーム祥風苑には盲人用グッズコーナーも



◀利用者たちに声をかけて歩くシゲ会長。利用者の顔が自然にはこころぶ



▲大船渡市デイサービスセンターの朝の様子。利用者を笑顔で出迎える



◀海と山の幸に恵まれた岩手を唄ったご当地ソングを、みんなで熱唱!

果を上げた。

和彦理事長は、「コンピュータシステムの導入は『必ずや富美岡荘のケアの質を高めるはず』と、シゲ会長は強く信じ、データを蓄積するだけでなく、それをケアに生かすための取り組みにも力を注いできた。蓄積されたデータを基に毎月徹底してカンファレンスを行い、老人心理学者をグループワークに呼び、定期的な

が2007年に開園し、(社)日本医療福祉建築協会の「2009年度医療福祉建築賞福祉施設の部」で唯一の受賞となった。その経験を生かし、2008年、大船渡に地域密着型介護老人福祉施設ハウス大船渡やグループホームまちぐるみオープンした。

さらに、こうした一連の事業拡大によって増えた職員の教育システムも独自につくり上げてきた。職員が急激に増えることにより、いつもの「あ・うん」の呼吸が取れない状態になってきた。今までは「ツーと言えばカー」の職員ばかりだったが、1年生職員も10年生職員も、同じ情報で同じケアを提供しなくてはならないと、シゲ会長は痛感した。そして、ケアの根拠を示すケアづくりの特化した。そのために平成7年という早い時期にコンピュータを導入し、入居者一人ひとりのケア記録をデータ化して、全職員に共有させ、経験年数に関わらず、同じ情報の中でケアの質を保つ努力をし成果を上げた。

さらに、こうした一連の事業拡大によって増えた職員の教育システムも独自につくり上げてきた。職員が急激に増えることにより、いつもの「あ・うん」の呼吸が取れない状態になってきた。今までは「ツーと言えばカー」の職員ばかりだったが、1年生職員も10年生職員も、同じ情報で同じケアを提供しなくてはならないと、シゲ会長は痛感した。そして、ケアの根拠を示すケアづくりの特化した。そのために平成7年という早い時期にコンピュータを導入し、入居者一人ひとりのケア記録をデータ化して、全職員に共有させ、経験年数に関わらず、同じ情報の中でケアの質を保つ努力をし成果を上げた。

兼任しながら、特養におけるユニットケアを追求している。個別ケアと従来型ケアで実証されているグループ・ダイナミクス(個々人にいい影響を与える集団ケアの利点)をバランスよく組み合わせ、新しいケアのあり方を模索中だ。こうしたパイオニア精神も、やはりシゲ会長から受け継いだものといえる。シゲ会長は、今までの施設をもっと発展させ「自宅で

勉強会は100か月続いた。そして実際にケアは大きく変わり、他の施設では尻込みするような医療依存度が高い重介護・認知症の高齢者も受け入れ、『富美岡荘に來れば、必ず褥瘡が治る』といった伝統も生まれたのです。シゲ会長は、科学的な根拠のあるケアの追求と情報の共有、さらにその精神は、とことんの愛情をもって、人間教育を含めたトータル的なケアシステムを発展させなければいけないと考え実践していた。現在も入居者の平均要介護度は4.5ですが、自信をもって『重度の方の介護が得意な施設です』と明言できる。ここまで来られたのは、やはり院長の『誰も挑戦しないことであっても、それがお年寄りのためになるのなら、私たちは進んで事を成す努力をしなければならぬ』という進取の精神のもとに、職員一丸となって頑張ってきたからだと思えます」と語る。

ちなみに和彦理事長は今、仙台市にある社会福祉法人杜の里福祉会の理事長も兼任しながら、特養におけるユニットケアを追求している。個別ケアと従来型ケアで実証されているグループ・ダイナミクス(個々人にいい影響を与える集団ケアの利点)をバランスよく組み合わせ、新しいケアのあり方を模索中だ。こうしたパイオニア精神も、やはりシゲ会長から受け継いだものといえる。シゲ会長は、今までの施設をもっと発展させ「自宅で

勉強会は100か月続いた。そして実際にケアは大きく変わり、他の施設では尻込みするような医療依存度が高い重介護・認知症の高齢者も受け入れ、『富美岡荘に來れば、必ず褥瘡が治る』といった伝統も生まれたのです。シゲ会長は、科学的な根拠のあるケアの追求と情報の共有、さらにその精神は、とことんの愛情をもって、人間教育を含めたトータル的なケアシステムを発展させなければいけないと考え実践していた。現在も入居者の平均要介護度は4.5ですが、自信をもって『重度の方の介護が得意な施設です』と明言できる。ここまで来られたのは、やはり院長の『誰も挑戦しないことであっても、それがお年寄りのためになるのなら、私たちは進んで事を成す努力をしなければならぬ』という進取の精神のもとに、職員一丸となって頑張ってきたからだと思えます」と語る。

ちなみに和彦理事長は今、仙台市にある社会福祉法人杜の里福祉会の理事長も兼任しながら、特養におけるユニットケアを追求している。個別ケアと従来型ケアで実証されているグループ・ダイナミクス(個々人にいい影響を与える集団ケアの利点)をバランスよく組み合わせ、新しいケアのあり方を模索中だ。こうしたパイオニア精神も、やはりシゲ会長から受け継いだものといえる。シゲ会長は、今までの施設をもっと発展させ「自宅で



謹賀新年 社会福祉法人成仁会職員一同 2010年1月1日

▲毎年元旦に撮影している職員の集合写真。女性陣は着物姿が習わし



▲東北地方の“老舗”特養である富美岡荘には、秋篠宮ご夫妻が来訪したことも

▶敬老会ときのシゲ会長



▶施設の壁には入居者の手作りアートが掲げられている。これらはすべて、古布など身の回りのモノで作成



▲成仁会理事長山崎和彦氏(右) 成仁会常務理事山口清人氏

◀シゲ会長を募う幹部職員(右から) 志田純子副施設長、崎山美知枝副施設長、小笠原登志江「蔵ハウス大船渡」園長



の生活を施設でそのまま継続して生活できる、21世紀型の特養に生まれ変わらなければいけない」、これを合言葉に、全グループ法人の指揮を生きがいとして、日々走り続けている。

大震災の経験をムダにしない！ いのちを守る施設づくりは 地域の人たちへの感謝のしるし

「私と同じ世代の高齢者にとって、戦争を経験した上に、千年に一度という大地震と大津波の被害にまで見舞われたのは本当に辛いこと。だからこそ、今後はよりいっそう、入居者さんたちに安心して元気に過ごしていただけるケアサービスを追求し、その志を理事長たちに引き継いでもらいたいです」と、シゲ氏は静かに語る。

こうした会長の意を受けて、和彦理事長らは富美岡荘を「いのちを守る施設」につくり直すべく、着々と準備を進めている。震災当日、富美岡荘から3 kmほど離れた、高台の避難所に避難した方が、震災後大分落ち着いて語ったのは、「寒さと恐怖と動揺、そして、街は全く灯りもなく真っ暗だったのに、遠くに1か所だけぼんやりと灯りが見えました。富美岡荘でした。なんて暖かいんだろう。その灯りに、ほんの少しだけ希望がみえました。富美岡荘のお年寄りは大切にされてるんだねって、みんなで話しました」と。

その言葉は、職員たちのさらなる元気に繋がった。その時は、1台しかなかった発電機を、現在は15台に増やし各フロアに配置。停電時の吸引機や暖房の動力として備えたほか、災害時でも小回りのきくスクーターや通信網がダウンした際に役立つ衛星電話、入居者だけでなく地域からの避難者約500人が1か月間しのげるだけの食料や水も備蓄した。さらに注目すべきは、東日本大震災にともなうアウトライズ地震が発生してガソリン流通が途絶えた場合に備え、近隣の旧ガソリンスタンドを購入予定で、燃料の備蓄も行う準備も整えつつある。一法人がここまでやるかと驚くが、彼らにとって、は当然のことなのだ。「ここで生まれて、ここで育って、大勢の人にお世話になって、少しでもお役に立てれば」。こうしたすべての行動は、シゲ会長から引き継がれた純粋な愛と感謝に基づいている。

これから先も

シゲ会長は言う。「これから私がすべきこと。それは託すことです。私の心情と行動と心を未来に向けて、高齢者の介護の精神と想いを、深い愛情を持ってこにあたること。和彦理事長や各施設長やみんなに託して心を育てること。それが私の最後の使命です」と。
「すべては愛から始まった…」